

波動時代への序幕 1992年 サンロード

江本 勝 (えもと まさる)

横浜市立大学文理学部国際関係論学科卒。中部読売新聞社を経て、(株)I・H・Mを設立。おもにアメリカ西海岸に在住する若手科学者のもつ技術を日本に紹介し、その研究開発の援助に貢献している。1992年、スリランカのジ・オープン・インターナショナルユニバーシティより「人体各部位と感情及び金属毒素波動との関係」の論文が認められ、医学博士の学位を受ける。現在、アメリカ法人バックテック社会長、MRA総合研究所所長、MRA研究会会長、(株)I・H・M代表取締役。

量子力学が基本

この辺で、MRAという機器の機能について説明することにしよう。

最近の量子力学という新しい物理学上での考察は、この宇宙の現象を理解する上で、物質の構成単位を究極の原子レベル以下の単位まで掘り下げて考えていかなくてはならないことを示している。

そして、これらの「超ミクロの世界」いや、最近では、「ナノメーター(10億分の1m)の世界」と呼ぶが、これらの世界で起きている事象は、今まで考えられていた物質の特性のほかに、数々の特性をもっていることが解明してきた。

これらの新しく認識された特性の中に「固有振動」という物理用語があり、これは次のように説明づけられている。

「例えば、人間の身体を例にとると、その構成図式は、原子→分子→細胞→諸器官・組織→人間の身体となるが、原子はその核のまわりを回転する電子の軌道が固有なものであり、それに応じて固有振動を発している。それらの集合体である分子、そして分子の集合体である細胞、さらに細胞の集合体である器官や組織も、したがって固有振動をもつこととなる」

つまり、人間の場合、心臓なら心臓、肝臓なら肝臓は本来固有の振動をもっており、それは、白人、黒人、黄色人による人種によって変わることはなく、馬や牛などの高等動物になればなるほど、人のもつ各々の部位の固有振動値に近似したものとなってくる。

MRAは、この各々の物質がもっている固有振動を探索し、検知することによって、物質のもっている特性を外部から測定する機器である。

しかし、一口に固有振動といっても、従来の科学技術力では、それが超微弱エネルギーであるため検知する術がなかったのであった。ロナルド・J・ウェインストックという当時29才にしかならない天才的研究者によって、この技術が初めて確立され集約されたものが、このMRAなのである。

その基本的なノウハウについては、現在、特許申請書類草案中であるので、残念ながらここで発表することはできないが、その仕組みは次のようになる。

MRAの仕組み

①物質の固有振動を、ノウハウで、また発表できない技術によって探索、検知し、それを4桁の記号及び数値によってコード化する。例えば、心臓はD166、肝臓はD273のようにである。

②人間の身体を增幅器として利用するため、その人間のもっている固有振動が、テストに影響を与えないようブロックする。

③テストしたい物質を機器の上に置き、調査したいコードを機器に入力する。

④人間の身体を通じて、テスト物質に対し、そのコードのもっている固有振動を送りこむ。

⑤もし、その物質が送りこまれた固有振動と同じ、もしくはそれに近い固有振動をもっている場合、それは共鳴現象を起こし、再び人間の身体を通じて、さらに、本来人間という最高のコンピューターがもつ増幅機能によって増幅され、共鳴音というサウンド及びその近似の程度を示す数字が(21を母数とする数字であらわされる)得られることとなる。

以上のような仕組みによってこの機器は成り立っているが、これにより次のような分析が可能となる。

MRAの機能

(1)人間の臓器や組織のチェック

このシステムにおさめられている臓器や組織のソフトには、健常者のそれがおさめられているため、共鳴度の近似、あるいは相違により、各器官の組織の異常度を推定することができる。

(2)バクテリア毒素、真菌毒素、ウィルス毒素のチェック

この場合、各毒素のもっている固有振動を中和する固有振動が設定されており、したがって共鳴するときには、それらの毒素は存在しないものと推定され、非共鳴の場合には存在するものと推定される。その程度についても同じ考え方である。

(3)各疾病ごとのチェック

ガンや糖尿病などの固有の疾病状況のときに、その組織の細胞が発信する固有振動を中和する固有振動が設定されており、当該の疾病が存在するか否かを推定できる。その程度についても同じ。

(4)そのほかの毒素のチェック

水銀や鉛、アルミニウムなど、人体にとって有害な毒素のチェックが、(2)と同じ方法で可能である。

(5)毒素や病原菌が存在する部位のチェック

(2)、(3)、(4)により、毒素や病原菌が存在することが判断された場合、それらがど

の部位にあるかをチェックすることができる。

(6)水質検査

水を機器の上に置き、チェックしたい元素や化学物質のコード、または現物を設定することにより、水の中にそれらが含まれているかどうか、また概数的にその比率をも知ることができる。

(7)食品チェック

水や食品がどのような機能をもっているかのチェックができる。例えば、抗ガン性の高いもの、その逆のもの、ある特殊な疾病に対してもよいか悪いかなど。これらを定型化して、食品の製造プロセスにおける品質管理チェックが有効である。

(8)物質と物質の共鳴度チェック

チェックしたい物質のコードあるいは現物を機器に設定し、共鳴度をチェックすることができる。これにより、期待される化学反応が起こるかどうか、危険な取り合はせではないかどうかなどチェックできる。また、物質と人間との共鳴度をチェックすることにより、化粧品、薬品などの人体に与える副作用などを予見するデータを得ることができる。

(9)固有振動の転写機能

水や食品、その他必要と思われる物質すべてについて有害波動が検出された場合、その振動を中和する固有振動を転写することができる。これにより、安全な食品や水の提供、あるいは薬品公害等の予防などに利用できる。

(10)固有振動のコピー機能

機器の上部にはIN WELLとOUT WELLと称する穴がついているが、IN WELLに入れた物質の波動をOUT WELLに入れた物質にコピーすることが可能である。

(9)、(10)の機能は、その強度を加減することも可能となっている。

精神波動と身体部位との関係

マイナーな精神波動と身体部位との同調関係を表⑦～⑪にかかげる。表中に1～21までの数字があるのは、21を分母としての同調率を示すもの、例えば21とあれば、それは21/21であり100%同調するということを意味する。

『病は気から』という現象を抽象的に説明されてきた方々は多々あると思うが、機械をもってそれを数値であらわしたという点においては、本書がおそらく世界では初めての論文であると思う。

もちろん、意見発表とそれが認知されることとは次元的にちがうことであるから、私が発表したい意見がいつ世の多くの人々によって認知されるか、あるいはされないかはまだ時を要することであろう。

表⑦「心配」「不安」「いら立ち」「怒り」「悲しみ」

「心配」「不安」は、おもに消化器系に同調することがわかる。特に、胃や大腸、腸管、直腸、食道には100%同調してしまう。

「いら立ち」は、神経系統に同調し、肩こりや、痛みの原因をつくってしまう。この表にはないが副交感神経にも100%同調し、不眠症の原因となる。

「怒り」は、卵巣と肝臓に100%同調する。怒りっぽい人は、これらの部位の病気になりやすい。また、悲しみは、血液やクモ膜、リンパに100%同調し、各々、白血病やクモ膜下出血等の遠因となる。

表⑦ 各精神波動と各部位波動との共鳴率表

陽		陰	
心配・不安	いら立ち・いらいら	怒り	悲しみ
21 大腸 胃 腸管 食道 直腸	21 肋間神経 腰椎 頸椎神経 仙骨	21 卵巣 肝臓	21 血液 クモ膜 リンパ
19 胸・乳房	18 気管支	19 胆のう	16 回腸
18 気管支 仙骨 肺	11 脊椎	16 心臓 海馬	12 副腎
16 陰茎 膣	9 膵臓	13 膀胱	11 卵巣 肝臓
14 肋間神経	8 甲状腺・副甲状腺	11 脳下垂体	9 胆のう
9 結腸 甲状腺・副甲状腺	6 脳 陰茎 膣 大腸 直腸	10 泌尿器系	腎臓 泌尿器生殖系 泌尿器系
7 膵臓 リンパ器官	5 胃 胸・乳房 リンパ器官	9 副腎 クモ膜 前立腺 腎臓 精巣	7 前立腺 脾臓
6 筋肉組織 腰椎	4 関節 結腸 食道	5 泌尿器生殖系	心臓 脳下垂体
5 虫垂	4 腸管 肺	6 回腸	海馬 膀胱
4 脳 脊椎	3 関節	5 血液 リンパ	精巣
		2 脾臓	

表⑧ 「無関心」「無表情」「ガンに対する恐怖」「やきもち」

「無関心」と「無表情」はミネラル吸収波動とも関係があり、ミネラルをよく吸収できない波動とこれらとがまったくの同調関係にある。いわゆる「もやしち子」のもつ精神波動である。

「ガンに対する恐怖」は女性の場合、子宮や乳房に同調する率が100%であることがわかった。また、腰椎にも100%同調している。末期ガン患者が一様に腰痛を訴えるのはこれに起因している可能性がある。

「やきもち」波動は甲状腺に同調する。極論かもしれないが、甲状腺は食欲コントロールの場でもある。女性のやきもちは肥満につながるという新説が成り立つかもしれない。

表⑨ 「愚図」「絶望」「ストレス」「否定的」

「愚図」とは動作の鈍いということであり、これがおもに子宮に同調することは、まだその意味をわかりかねている。

「絶望・自暴自棄」は絶対もってはならない精神波動である。というのは、人間にとて1番重要な部位(脾臓・腰椎・仙骨・心臓)におもに同調してしまうからである。まさに「絶望」は愚か者の結論である。

「ストレス」については、最近では西洋医学の医者たちでさえその存在を認

表⑧⑨ 各精神波動と各部位波動との共鳴率表

陽

無関心	無表情	癌に対する恐怖	やきもち	愚図	絶望・自暴自棄	ストレス	否定的
21 肋間神経 脊椎 関節 筋肉 視神経	21 脳 13 リンパ器官 舌	21 脳 心臓 子宮 胸・乳房 リンパ器官 腰椎 副交換 眼神経	21 直腸 甲状腺 15 腰椎 14 腸管 陰茎 13 胃 子宮 16 甲状腺 14 結腸 13 胃 関節 12 直腸 頸椎 11 膝 大腸 脾臓 食道 腸管 陰茎 10 鞘帯 舌	21 子宮 18 脳 17 頸椎 16 肋間神経 直腸 甲状腺 腸管 11 肺 関節 眼神経 10 虫垂 肋間神経 胸・乳房 筋肉 11 膝 大腸 脾臓 食道 腸管 陰茎 10 鞘帯 舌	21 脾臓 陰茎 19 腰椎 17 仙骨 16 心臓 14 気管支 13 大腸 直腸 関節 椎間円板 12 筋肉 14 リンパ器官 13 鞘帯 副交感 肺 脾臓 12 胃 視神経 10 食道 鞘帯 10 関節 背椎	21 骨 食道 脊椎 副交感 舌 19 脾臓 子宮 結腸 16 気管支 心臓 脾臓 仙骨 直腸 頸椎 鞘帯 鼻腔 15 肺 リンパ器官 虫垂 14 視神経 13 大腸 関節 12 筋肉 11 肺 10 食道 14 視神経 13 大腸 12 甲状腺 腰椎 脳 11 膝 筋肉 10 眼神経 骨盤	21 胃 16 虫垂 脳 脾臓 肋間神経 視神経 15 子宮 腰椎 13 直腸 12 腸管 11 脊椎 骨盤 舌 10 心臓 関節

め、これが我々の身体に与える影響の深さを指摘している。表をみればわかるように、この精神波動は身体中のいろいろな部位の波動と強く同調している。「病」の素の王様といった感じがある。

「否定的」な精神波動は胃の波動と強く同調する。オープンマインドな気持をもたないと消化不良につながるということだと思う。

表⑩ 「ひがみ」「あきっぽい」「不信」「妄念」

「ひがみ」の精神波動ももってはいけない波動である。これは血液、副腎、脾臓、リンパ節という免疫やホルモンに関係する部位と同調するからだ。

「あきっぽい」という波動も脾臓に強く同調する。ご存じのように脾臓は免疫をつくる器官であり、ほかの同調部位をみても身体の活性化を減じる恐れがある。

「不信・疑惑」については、いつも人をうたぐったり、信用できないという人は、心臓を悪くする傾向にあると推測できる。そして、重要な脳の部位にも同調するので、記憶や情緒の点で心配となってくる。

「妄念・脅迫観念」は、まだその機能がよくわかっていない、脳の灰白隆起に主に同調するが、たぶん情緒面において何かしらの問題となつてあらわれるのであろう。

表⑩⑪ 各精神波動と各部位波動との共鳴率表

ひがみ	あきっぽい	不信・疑惑	妄念・強迫観念	抑うつ	恨み	非常に恐怖	さびしさ
21 血液 副腎 クモ膜 卵巣 脾臓 精巣 リンパ節	21 脾臓 精巣 喉頭	21 心臓 15 海馬	16 灰白隆起 15 回腸	21 前立腺 心筋層 皮膚 腎臓	21 回腸 皮膚	21 クモ膜 卵巣 前立腺 腎臓	21 脳下垂体 海馬
18 回腸	19 回腸	13 脳下垂体 灰白隆起	13 皮膚	18 仙骨	18 神経細胞	19 灰白隆起	19 灰白隆起
17 心臓 胸腺 神経細胞	18 肝臓 腎臓	10 胸腺 空腸	12 鼻腔 海馬 前立腺	16 副腎	16 肛門 海馬	16 血液 心臓 肝臓 胆のう 脾臓 リンパ節	16 血液 心臓 肝臓 胆のう 脾臓 リンパ節
16 胆のう 腎臓	17 膀胱	11 脳下垂体	11 血液 神経細胞	15 精巣	13 喉頭	13 喉頭	13 喉頭
15 膀胱	16 泌尿器系	10 肝臓	10 肝臓 泌尿生殖 喉頭	12 仙骨	12 仙骨	12 仙骨	12 仙骨
13 鼻腔 毛髪 泌尿生殖 脳下垂体	14 泌尿生殖	11 胃	11 卵巣	11 卵巣	20 泌尿生殖	20 泌尿生殖	20 泌尿生殖
12 泌尿器系 空腸	10 胆のう	10 泌尿生殖 膀胱	10 半器官 心臓	19 脾臓 膀胱	19 脾臓 膀胱	12 副腎 卵巣	12 副腎 卵巣
11 喉頭 海馬				18 肝臓 胸腺	18 肝臓 胸腺	11 精巣 胸腺 毛髪	11 精巣 胸腺 毛髪
				17 鼻腔	17 鼻腔	16 副腎 心臓	16 副腎 心臓
				15 脳下垂体 空腸 半器官	15 脳下垂体 空腸 半器官	10 回腸 クモ膜 腎臓 皮膚	10 回腸 クモ膜 腎臓 皮膚
				14 血液 リンパ節	14 血液 リンパ節	11 胆のう	11 胆のう
				10 回腸 仙骨 皮膚	10 回腸 仙骨 皮膚		

表⑪「抑うつ」「恨み」「非常に恐怖」「さびしさ」

「抑うつ」は、腎臓病の人や膠原病の人によくみられる精神波動である。心筋層にも強く同調しているので、心筋梗塞気味の人がおられれば自問自答していただきたい。

「恨み」は、これはいわゆる靈障現象を含むものと思われる。自己を振り返っても、特に恨みをもっていない場合でも見受けられることがあるからである。この波動が皮膚に100%同調するということはうなづける。怪談に出てくる、お岩さんのような人は恨みで皮膚がただれてしまったのかもしれない。

「非常に恐怖」は、ストレスと並んで、この精神波動も非常に厄介な波動である。身体中の広範囲にわたって同調している。私の体験では「てんかん」症状をもつ人にはこの波動が必ず検出された。また、悪い夢をみてうなされることの多い人、寝汗をよくかく人にも見受けられた。

「さびしさ」の波動は、脳のなかで記憶の役割と関係のある「海馬」に同調している。老人性痴呆症の原因は、まさしくこの波動であると私は思っている。連れ合いをなくしてしまった人、現役時代は華々しく活躍していた定年退職者などに、この症候群が多いことがそれを証明している。この波動は、アルツハイマー症の主原因といわれているアルミニウム波動にも、100%同調することがすでにわかっている。

このように、各精神波動と身体の部位との波動は、各々複雑な同調関係にあることがわかつてきた。

私たちは今まで人が同じような環境に育ち、同じような年齢、肉体をしているにもかかわらず、人によって致命的な病におちいったり、あるいは同程度の打撲や事故にあっても、ある人はその後遺症に一生悩まされたり、あるいは逆に1~2週間でケロッと治ってしまっている、というような現状に対してまるで理解することもできずに、「あの人は運が悪かった」「あの人は生まれつき丈夫ではなかったのだろう」「あの人はああいう家系に生まれたから」と、まったく表面的な解釈をするしかなかった。

しかし、もし読者諸兄が私の述べてきたことを本当に理解してくれたならば、その瞬間あなたは、病気に対する不安から少なくとも50%は開放されたはずである。というのは、すべての病気の原因は、我々自身がもっているマイナスの精神波動に起因することがご理解いただけたはずだからである。

神は我々を、明るく正しく清らかな愛にあふれたものとして創造されたのである。しかし、我々人間が、神の意志とはちがった方向に進んでしまっていることに対して、きちんとその代償が我々にくるよう、あらかじめ設計されてもいたのであろう。

とにもかくにも、人間そのもののメカニズムが今や明らかにされようとしている。これらのことと正しく理解することによって、人は己のマイナスな精神波動を悔い改めようとするにちがいない。

正しくさえ理解できれば、それらマイナスの精神波動がやがて確実に、その個人を破滅においやることが理解されるからである。そして、本当にこのことを体得されたならば、そのようなマイナスな精神を捨て去ることはそれほどむずかしくはないはずである。それは自分自身の中にあるものであって、自分自身でのみ取り去ることのできるものであるからである。

電磁波公害被害者の具体例

ケース① 32歳 パチスロ店経営(男子)

本人の申告によれば極度の疲労感と倦怠感、めまい、吐き気のもち主、特に電車や地下鉄に乗ると非常なる恐怖感に襲われ倒れることがしばしば。

MRAによる波動測定の結果、パチスロというコンピューターが生み出す超短波放射線波動が、深く身体内部に浸透していることが判明。共鳴磁場水に同波動を中心和する波動をプリントし与えたところ、10日後に本人より「すべての問題点が解決した」との報告あり。

ケース② 55歳 主婦

いいようもない不安感とめまいなどで1人で外出できない。常に疲労感と倦怠感がある。研究所にも常に娘さんが付添ってきていたが、やはり超短波放射線の反応が出る。

伏線として気苦労、いら立ち、神経質などの精神波動が多数あった。それらの波動を中心和していくところ、4回目には1人で笑顔で来所、顔つきも変わっていた。

ケース③ 45歳 スーパー経営

強く恒常的な疲労倦怠感、眠気、いら立ちなどあり。原因は非常なるカーマニアで、いつもコンピューターが内蔵されている高級車の中にいることが多く、それらが発する超短波放射線によるものとわかった。ストレス反応も同程度あり、それが呼び込むものと思われた。

ケース④ 22歳 OL

活力、スタミナに乏しく疲労感が抜けない。通勤が非常に苦痛。風邪もひきやすい。原因は、コンピューターのオペレーターという彼女の職業上の理由による、超短波放射線波動。現在はまったく問題ない。

ケース⑤ 40歳 当研究所研究員

セミナー準備のため、ワープロによる原稿作成業務が2~3日間つづいた。私の原稿の完成が遅かったため、セミナー前夜はほとんど徹夜となってしまった。当日の午前中ワープロを扱っている途中、異常なめまいと吐き気を訴えてダウン。

あいにく私が1時間程度留守にしていて、その間、救急車を呼ばうかというくらいのひどい症状であったらしい。私が戻ってチェックしたところ、急性電磁波病とでもいうべきか、超短波放射線に完全にやられてしまっていた。

もちろん、長時間にわたるワープロ業務のためである。すぐに共鳴磁場水を30ccほど飲ませたところ、1時間ほどで何ごともなかったようにケロリとして、勤務に復することができた。しかし、もしこのような技術がなかつたらと思うと、今でもゾッとする思いである。彼は、ひょっとしたら未だに入院していたかもしれない。

以上、述べたケースの他に超短波放射線、X線などの、いわゆる電磁波公害で悩まされていた人の例は多数ある。それらの方々の職業をみるだけでも、その因果関係がしのばれると思われる所以、次に列挙しておこう。

- ・ 医師(とくに歯科医師)、パイロット、タクシー運転手、コンピューター技師、OL、一般事務職、芸能関係、主婦(高圧線下に住居をもつ)、子供(ファミコン病)、浪人生、美容師、学生(オーディオ好き)、工員、ハンバーガーショップの店員(電子レンジの影響)など。

人体はコンピューターと同じ

問題はなぜ、電磁波は人体にとって有害なのか? ということである。

この問題をわかりやすく説明するためには、人体をコンピューターになぞらえてみることが、1番よい方法と思われる。実際、この3年の間MRAという波動測定器を得て、多くの方々を波動という側面から分析をしてきた。そこで痛切に思うことは、人体というものはまったく複雑な波動の合成によってできている。つまり、非常に高度なスーパーコンピューターと同じなのだから、ということであった。

この機能の開発者であるロナルド・J・ウェインストック先生は、このあたりの関連を次のように述べている。

『細胞は、コンピューターのハードディスクのように情報を貯えている。神経組織は、脳(マイクロ・プロセッサー)から細胞や器官(コンピューターの端末やプリンター)

に情報を伝える電子回路の役割をしている。

人体が発する共鳴波動は、コンピューター・ラングウェッジ→1110010011001と同じである。コンピューター・ラングウェッジが、直流パルスによって回路を通じて運ばれるのと同じように、電磁波パルスによって神経組織を通じて運ばれて情報を伝える。たん白質や酸素は、コンピューターにおける半導体の役割をなしている』

このように、人体の機能がコンピューターと同じように、エレクトリックエネルギーによって成り立っていると考えることができれば、各種の電磁波が私たちの身体の中に侵入し、体内の電子回路に同調もしくは変調を与えるのも当然である。その現象が、結果的に生理機能に対して重大な影響を与える得るということは、容易に想像することができる。

電磁波の影響を受けやすいタイプ——送信機と受信機の関係——

電磁波は現代文明社会において、容赦なく私たちを襲ってきている。しかし、同じように電磁波を多く受けている職場にいながら、その影響に個人差があるのはなぜだろう。

いうまでもなく、これは受信機をもっているかいなかの差である。

私たちは日常生活において、すでに十分すぎるほど、これらの電磁波の特性を活かしての技術を利用し、恩恵を受けている。例えばポケットベルの例をあげよう。

ある特定のダイヤルを回せば、その番号の受信機をもつ人が通常、情報発信地から50km圏内にいれば、その受信機はピヨピヨと鳴り反応する。その受信機がオフになっていたり、他の番号の受信機をもっている場合には、その波動はその人に届かない。

このように、波動というものは送信側と受信側があって、初めて1つのエネルギーが、移動することとなる。

人間の身体の中で、その受信機の役割をするものがある。その受信機の数の多さ、深さによって先ほどのべた個人差が出てくるのである。その受信機とは、やはり私がかねてより申し上げてきている、マイナスの精神波動であるのだ。

例えば、ストレス、いら立ち、気苦労、怒り、悲しみ、恐怖などのマイナスの精神波動が、各電磁波の受信機の役割をしている説である。そして、電磁波の波長帯と人間の身体組織の波長帯との関連は、次のようにになっている。

超短波放射線 細胞レベル

紫外線 分子レベル

X線 原子レベル

つまり、各精神波動の深さによって、それが存在する部位へ各々の電磁波を呼び込んでしまうこととなる。

その程度によって、それが人間の電子回路バランスを複雑に乱すこととなり、生理機能への影響が複雑な症状となってあらわれてくるのもと思われる。

ますます増大化するであろう電磁波動に対して、我々は防御体制をつくっていかなければならない。とりあえず、次のような方法が思いつかれる。

- (1) 電磁波を発生するものを使わない。
- (2) 電磁波の少ない地域で生活をする。
- (3) 電磁波をシールドする器具を開発する。
- (4) 身体の中にある受信機をなくす。
- (5) とりあえずの対策に波動水を飲む。

現実の問題として、(1)及び(2)は不可能なことであろう。

理想的には(4)の方法が1番であるが、これもかなりの時間を必要とする(呼吸法、瞑想法、座禅、体操、マッサージなどによる意識のコントロール化への訓練が必要となるため)、とりあえず、(4)の方向へと始動しながら、(3)あるいは(5)の方法をとることが、現在考えられる。

これらが最善の方法であると思うが、マイナスの思考に落ち入りそうになったとき、それを意識的に転換することが、どの場合でも重要なポイントである。